

音楽

共鳴する音と言葉

原発事故主題「光のない。」再演

原発事故がモチーフの舞台「光のない。」が今月、神奈川と京都で再演される。京都を拠点とする劇団「地点」が2012年、東京で初演。オーストリアのノーベル賞作家、エルフリーデ・イェリネクがウェブ上に発表した戯曲を元に、世界的音楽家の三輪眞弘と気鋭の演出家で「地点」代表の三浦基がタッグを組んだ。国籍も世代も超えた魂の共演が「3・11」後の現在と未来をあぶりだす。

言葉は、人々に特定のイメージを共有させる便利な「装置」でありながら、想像の自由な飛翔を縛る枷にもなる。そんな言葉を、音符しながらの多義的な世界へと開いてゆく「光のない。」は初演時、多くの音楽ファンをも魅了した。

「たとえば冒頭。「わたし」「わたし」「わたし」「わたし」と、演じ手が幼子さながらにひたすら繰り返す。その声が強度を増すほどに、「あ



体には筋肉に刺激を与える機器。意図せぬ方向に手が動き、握った鈴を鳴らす。テクノロジーに逆に操作される人間の姿が浮かび上がる。松本久木氏撮影

なた」と「わたし」の境界がぼろぼろと壊れ、哀しさと滑稽さが同居する不思議な感覚をもたらしてゆく。あらゆる拘束から逃れた言葉のひとつひとつを、三輪の音楽が優しく受けとめる。舞台後方の白い光が、幕が下りたあと、原子炉の黙示のごとく目の奥に残る。

同年に初演された、太宰治の小説に基づく「トカトントン」でも、三浦は晩年の太宰が「トカトントン」という言葉に込めた虚無、諦念、楽観、感傷といった多様な感情を見る者の心に豊かにちりばめてみせた。

「大学のとき、狂言の授業がすごく楽しかったです。意味を超えた『言葉』の存在を実感した。イェリネクという言葉も、悲観にも楽観にも傾かず、人間という存在そのものの手応えを素朴に音にしていた」

俳優が携える2台のバイオリンは、福島の原発2基の暗喩か。バイオリンはドイツ語で「Geige (ガイゲ)」。放射線量を測定するガイガーカウンタを思い起こさせる。人の心を癒やす楽器と、汚染を確認する無機質な機器に、同じ響き

「役立たない」音楽こそ生／人間 素朴に表現



三浦基(右)と三輪眞弘

が与えられた皮肉。これは、デジタル音楽の分野で世界の先頭を走りつつ、楽譜による再現という「制度」に違和感を感じ続ける三輪自身の姿に重なる。

三輪がベルリン留学時代に学んだ尹伊桑は、60年代にスパイ容疑で拘束され、ソウルで死刑判決を受けながら、カラヤンはじめ各国の芸術家の嘆願で一命をとりとめた巨匠だ。一音一音が、生の手触りに相違なかった。「世の中のものさしが経済と数に集約されつつある現代社会において、金銭に換算されぬ『役に立たない』音楽を書き続けることこそが、人間として生きてゆくという宣言だと信じている」と三輪は言う。

震災から3年。初演時はまだ、誰もが精神的な「余震」の中にいた。今回の再演は、人々の忘却の速度をはかる里程標でもある。11月13日、横浜のKAA T 神奈川芸術劇場。18、19日、京都芸術劇場春秋座。045・6333・6500 (KAA T)。(編集委員・吉田純子)

ぴったりの曲父の映画に

ジャズベーシストのカイル・イーストウッド

ジャズベーシストのカイル・イーストウッド(46)が、父で映画監督のクリント・イーストウッドの新作「ジャーシー・ボーイズ」(公開中)で音楽の一部を担当している。人気ポップグループ「ザ・フォー・シーズンズ」の栄光と挫折を描くミュージカル。「父に頼まれて、いくつかの場面で曲をつけたり、アレンジしたりしたんだ」

音楽好きの父の影響でジャズをはじめ、1998年メジャーデビュー。「9歳のころに父にモントレー・ジャズ・フェスティバルに連れて行ってもらったのがきっかけ。ピアノを最初に教えてくれたのも彼。父が僕に音楽への道を示してくれた」

近年は公演活動の傍ら、父の作品に楽曲を提供している。「グラン・トリノ」(2008年)ではゴールデングローブ賞の最優秀主題歌賞にノミネート



若山和子氏撮影

されている。

「意見が対立することもあるが、これだけうまくやれているのは、僕がずっと父の仕事を見てきたから。どういう音楽にすれば好きかわかる。それに大好きなものが『音楽と映画』という点で一致しているのが大きい。気が合うんだよね」スクリーンでは頑固で怖いおやじを演じ続けているが、素顔の父は? 「家庭の彼は幸運にして『ダーティーハリー』じゃない。物腰の柔らかい普通の人。スクリーンの印象とは違う。とっくみあいのけんかなんかしたことはないよ」(斎藤勝彦)

悲しみの中に華やかさ潔く

悲しみの中にも華やかさがある浄瑠璃の新内節を聴かせる「新内剛士の会」が12日、東京都千代田区の紀尾井小ホールで開かれる。剛士は「佐倉義民伝」から「不断楼下総土産」住家の段々子別れの段」を披露する。

江戸時代、下総国の佐倉藩で厳しい年貢の取り立てに苦しむ農民のために、將軍に直訴した木内惣五郎(後の佐倉宗吾郎)の物語。家族に重罰が及ばぬよう、妻と子どもたちに別れを告げる場面が山場だ。「現代人が忘れかけている自己犠牲というメッセージを伝えたい」と剛士。

浄瑠璃「新内剛士の会」

の長男。2012年に会を立ち上げた。これまで「道中膝栗毛」「関取千両」をかけてきた。

「私の父は厳しく芸は見えて聞いて盗めという姿勢の人。『子別れの段』を語りながら、父の思いを立場を変えて感じられるようになった」と、剛士は明かす。葛藤場面が長く続いた後、惣五郎は決意する。「葛藤の場面は、ベタベタしないように淡々と表現し、別れの場面は、心が解放されていく感じを力を含めながら表現したい」

別れ際、「おーい、おーい」と惣五郎が振り向いて声をかける。「きつと心の叫びなのでしよう。今の世の中にも惣五郎が何かを訴えかけていると表現できたら」と話す。

12日午後2時半開演。三味線は新内勝一朗、鶴賀喜代寿郎ら4人。3千円。事務局(03・3261・8002)。(山根由起子)

富田勲の交響絵巻「源氏物語」

紫式部の「源氏物語」をオーケストラ、邦楽器、シンセサイザーの融合でかせる富田勲の「源氏物語幻想交響絵

巻」が12日、神奈川県座間市のハーモニーホール座間で上演される。過去、英国などで上演。現代京ことば訳の語り

を交え、2011年に改めてCD化した。立体音響を駆使するトミタ・サウンドを体験する絶好の機会だ。電話046・255・1100(ハーモニーホール座間)。(吉田純子)



星ひかる氏撮影

喜ばせたい思いが力に

咽喉がんで療養し、2日に東京都内で復帰会見した指揮者の井上道義。11日、神奈川・鎌倉芸術館でNHK交響楽団とブルックナーの交響曲第9番を奏で、聴衆との再会を果たす。

「相当、大変でした」が第一声。手術はせず、放射線治療を選んだ。のどが焼け、体重も10kg減った。痛みで水も飲めず、胃ろうを2カ月体験。耳管がふくれ、音もよく聞こえない。そばを食べてもセメントのように味気なかった。

「本当にひどい病の時は、音楽を聴く気にならなれないと思ひ知った。僕よりもっと重症

の患者さんたちを見ながら、生きるって何だろうと考えた」

闘病中は、確執を抱えたまま亡くなった父への贖罪の思いを含め、舞台音楽を作曲していたという。大好きな野田秀樹と「フィガロの結婚」をやるという夢にも支えられた。会見場となった劇場の舞台には、音楽監督を務めるオーケストラ・アンサンブル金沢などの楽員がつくった千羽鶴や、ファンから贈られた励ましのメッセージがずらり。

「会いたいと言ってくれる人たちのためにも、戻らなきゃと思った。誰かを喜ばせたいという気持ちだけが、今も、これからも、僕の生きる力だから」(編集委員・吉田純子)